福島の蔵書印　―その３７―

鯨龍文庫の蔵書印

平成 17(2005)年 3 月、一冊の追悼論文集が刊行された。本の名は『歴史智の構想』、前年 33 歳の若さで急逝した歴史哲学者鯨岡勝成氏を悼み、ゆかりの人々が寄せた論文集である。

鯨岡氏は昭和 46(1971)年双葉郡広野町生まれ。地元の学校を卒業後、立正大学の大学院で哲学を専攻、ドイツ留学を経て東京電機大学、多摩美術大学で講師を勤めていた。

双葉高校在学時は史学部に所属し、機関誌『双葉史学』16 号(平成 2 年)へ「双葉郡南部の製鉄遺跡について」を共同で発表している。以後『いわき地方史研究』(いわき地方史研究会)、『史峰』(新進考古学同人会)、『いわき民報』などに次々と論文を執筆、その研究足跡は『歴史智の構想』巻末「故鯨岡勝成先生著作目録」に詳述されている。

追悼論文集の発起人であり恩師である大竹憲治氏は鯨岡氏の研究姿勢について「哲学者の立場で日本の宗教思想史や地域文化人を観察し、体系づける新しいジャンルを切り開こうとしていたのである。この姿勢は、哲学のみにこだわらず、歴史・文学・美学・音楽と幅広い知識を持っていた彼独自の発想であった。」(『いわき地方史研究』41 号)と述べている。20 歳から 27 歳にかけての文章をまとめた『極辺精神史　一瞥的観光』(竹禅庵文庫　平成 11 年)ではいわき出身の文人大須賀筠軒と、その子息で俳人の大須賀乙字についての考察を中心に、仏教者原坦山、経済学者櫛田民蔵、祖父が双葉町出身である志賀直哉の人物像について自論を展開している。

上掲の印影は『歴史智の構想』より採録した。鯨岡氏の蔵書約一千冊は大竹氏の竹禅庵文庫に収められ、生前、日龍と号し鯨龍と字していたことから鯨龍文庫と命名された。

追悼論文集からはゆかりの人々が突然の訃報に接し、茫然自失として深い悲しみに包まれていることが静かに伝わってくる。

〈地域資料チーム：丹野律子〉